るとなり、白を多く種べし、是も山に自然と生たるが性よけれども、又里に種るをも用ゆべし、種る地は、よく肥たる砂地に、ちと土のまじりたるよし、眞土も肥たる地の、ねばりけなきはよし、地ごしらへは、粉糞、熟したる馬糞、或やき糞などにても、其地味により見合、是をまじへ、其上に熟糞をかけ、よく乾し、度々うちかへし、こなしさらし置て種べし、種かゆる事あらば、八月末九月始、其年の節によりて考へうゆべし、子を種る法、地を右のごとくこしらへ、畦の間一尺ばかり、其上に深さ三寸程に筋をほり、能糞土を敷、子を種る事、一寸餘に一粒づゝ、付合ぬ樣にちどりあしに種べし、又肥土にて七八分程に、種子おほひすべし、生て後夏は日おほひをし、冬は雪霜のふせぎをし、二年めの九月の比、又別に能地を去たゝめ置て、畦の間を二尺ばかりにして移し種べし、四五年に至ては、其根大になり、藥種と成べし、十月の初掘取、よく洗ひ日に干、かたくなりたるを收置、藥屋に賣べし、但中以下の地には種べからず、山下の里猪鹿多く、穀物は作り難き所に肥地あらば尤多く作るべし、

〔草木六部耕種法四 需根〕芍藥牡丹ヲ作ル法

芍藥　山中自然生ハ、性味強クシテ上品ナルコトハ論ズルニ及バズ、然レドモ入用ノ甚多キ藥物ニテ、勿論自然生ニテ用ノ足ベキニ非ザルヲ以テ、種子ヲ蒔キ苗ヲ爲立テ、此ヲ作ラザルコトヲ得ズ、凡芍藥苗ヲ爲立ル法ハ、先墳土或壚土ノ日當リ能キ場處ヲ撰ビ、新墾故畑ニ拘ハラズ、牛馬ノ力ヲ用テ細耕シ、此ニ馬糞ヲ入ルコト、一畝十荷ノ割合ニシテ能ク耙交置、然シテ後ニ芍藥ノ實ノ能ク熟シ、黑色ニ成タルヲ採リ、直ニ此ヲ右苗代ニ蒔テ、其上ニ小便灰一升、細土二升ヲ混合シテ、厚三四分程覆土スベシ、容易ニハ芽ノ出ザル者ナリ、時々盛養水ヲ灑ベシ、且寒中ハ馬糞ヲ厚ク其上ニ掛ケ置クヲ良トス、翌年モ能ク他草ヲ耘リ、秋ニ至テ先其植地モ、墳土カ壚土ノ日當リ能キ場處ヲ、新墾故畑ヲ論ゼズ、牛馬ヲ用テ幾遍モ犂返シ、且厩肥ノ能ク腐レタルヲ澤山ニ